

知的障害者スポーツにおける障害理解に関する検討

A Study on Understanding Disability in Sports for People with Intellectual Disabilities

田引 俊和

要旨

「知的障害」ということについて、米国精神医学会の精神疾患の診断統計マニュアル第5版(DSM-5-TR)の「概念的領域」「社会的領域」「実用的領域」を視野に入れ、スポーツ場面における具体的な実態、および一般的な発達に関連する知見をもとに再考する。

知的障害者スポーツでは障害当事者の個人差が大きく、各領域の特徴を意識した上での対応や支援が求められ、このことは知的障害者スポーツ指導員・コーチ等の専門性の一部と成りうる。

キーワード：障害者スポーツ(disability sports)／精神疾患の診断統計マニュアル第5版(DSM-5-TR)／知的障害者の心理(psychology of people with intellectual disabilities)

1. はじめに

(1) 背景

第3期スポーツ基本計画(スポーツ庁、2022年度からの5年間)では、「スポーツを実施する機会の創出」ということが示されており、そこには障害のある人も含まれ具体的な目標も示されている。本稿で検討対象とする知的障害のある人のスポーツについては、週1日以上の実施割合が23.1%(スポーツ庁 2021)と、成人一般の59.9%(同)と比べるとやや低いものの、全国的な大会の実施¹⁾や関係諸団体の設立²⁾など、その環境は次第に整いつつある。

また、同計画では「8. スポーツを通じた共生社会の実現 ①障害者スポーツの推進」として、「障害者スポーツ指導者を含む障害者スポーツに係るスタッフの確保」への言及がみられる。とくに様々な制約のある知的障害のある人の身体活動・スポーツにおいてはサポートが不可欠で、今後、「裾野を広げ、山を高め、木を繁らせる(日本障がい者スポーツ協会編 2020)」ためにも指導員・コーチ等の養成、充実化が求められる。

(2) 問題意識

すでに障害者スポーツの場では障害のある当事者だけでなく、その周りでは様々な人が活動に携わっており、指導員・コーチ等の養成も行われている。例えば、日本パラスポーツ協会のパラスポーツ指導員の養成課程では知的障害に関する内容が含まれている(日本パラスポーツ協会編 2023)。民間の知的障害者スポーツ組織「スペシャルオリンピックス」でも知的障害のある人のスポーツを支えるボランティア養成研修が行われており(スペシャルオリンピックス日本編 2020)、一定数のスポーツボランティアが活動に参加している³⁾。

知的障害のある人のスポーツを支え、指導することについては、いくつかの工夫やかかわり方などが紹介されている。「スペシャルオリンピックス」では、ボランティアとして携わる人を対象とした研修資料で基本的なコミュニケーションや関わり方、(障害のある当事者を)称賛すること、ルールの工夫、安全管理などが(スペシャルオリンピックス日本 2021)、また、東京都(2016)の「障害者のスポーツ施設利用促進マニュアル」では、ルールの工夫、コミュニケーション、用具・音楽などの使い方といったことが示されている。さらに、知的障害者スポーツやアダプテッド・スポーツのテキスト(曾根 2017; 村上 2017)もある。どれ

TABIKI, Toshikazu

北陸学院大学 社会学部 社会学科
障害者福祉論・障害者スポーツ

も丁寧で分かりやすい内容となっており、その研修内容の特徴や専門性をまとめた知見(時本・増田 2021; 時本・葛西・増田 2022)もみられる。

ただし、「知的障害」そのものについては、「知的能力の発達や適応行動に遅れ、難しさがある(スペシャルオリンピックス日本 2021)」、「知的機能の障害が発達期(概ね18歳まで)に現れ、記憶、推理、判断などの知的機能の発達が、全般的に遅れた状態(東京都 2016)」という一般的、抽象的な説明となっている。本稿の問題意識はここにある。もう少しスポーツ場面を意識して「知的障害とはどのようなものか」を具体的に表した内容であるならば、初めて携わるようなスポーツボランティアにも分かりやすく、また現在の工夫やかかわり方の研修や資料・テキスト等もより理解、活用できると考える。

(3) 検討方法と用語の取り扱い

本稿では、知的障害者スポーツの具体的な内容を意識して知的障害の特徴を検討する。次節で述べるDSM-5-TRの「概念的領域」、「社会的領域」、「実用的領域」の3つの領域(日本精神神経学会監修 2023)を中心に、具体的な事象とともに一般的な発達に関連する資料・先行研究をもとにこれまでの知見を確認し若干の考察を述べつつ、その上で最後に全体を通した考察をまとめる。知的障害者スポーツの指導員・コーチ等の研修・養成に係る教材作成、充実化のための基礎資料とすべく検討を行う。

なお、本稿では「参加型」の知的障害者スポーツを意識して展開する。Virtus(旧INAS)など競技性の高い知的障害者スポーツは今回対象としない。加えて障害者のための特別なスポーツがあるわけではなく(大久保 2012: 23)、同様に、「知的障害者スポーツ」という専門競技が存在するわけでもない。その上で、本稿では障害者が行う、または参加するスポーツが一般的に「障害者スポーツ」または「パラスポーツ」と称されていることをふまえ、知的障害者が行う、参加するスポーツを「知的障害者スポーツ」とする。

また、「知的障害者」の表記は精神薄弱福祉法から知的障害者福祉法への法改正(1999年)以前は「精神薄弱者」という呼称であったが(中央法

規 2010)、本稿では基本的に「知的障害」を用いる。併せて、近年では「障害」を「障がい」、「障碍」と表記する議論もあるが、関連法等に基づき「障害」とする。いずれも引用等の場合は原文通り用いる。

2. 知的障害の基本的理解

(1) 知的障害の定義、状況

はじめに知的障害について概観する。知的障害については知的障害者福祉法ではとくに定義されていないが、厚生労働省の「知的障害児(者)基礎調査」では、「知的機能の障害が発達期(おおむね18歳まで)にあらわれ、日常生活に支障が生じているため、何らかの特別の援助を必要とする状態にあるもの」と定義することが示されている。また、その判断基準は、次のいずれにも該当するものを知的障害とすることが示されている(厚生労働省)。

- (a) 標準化された知能検査(ウェクスラーによるもの、ビネーによるものなど)によって測定された結果、知能指数がおおむね70までのもの。
- (b) 日常生活能力(自立機能、運動機能、意思交換、探索操作、移動、生活文化、職業等)の到達水準が総合的に同年齢の日常生活能力水準(別記1)のいずれかに該当するもの(※別記1は省略)。

知的障害の程度は、知能水準(IQ)のⅠ：おおむね20以下、Ⅱ：おおむね21～35、Ⅲ：おおむね36～50、Ⅳ：おおむね51～70と、日常生活能力水準により判定されることになる。

また、米国精神医学会の精神疾患の診断統計マニュアル第5版(DSM-5-TR)では、重症度のレベルはIQ値ではなく適応機能に基づいて定義するとされており、基準A、B、Cで診断されることが示されている。基準Aは、論理的思考、問題解決、計画、抽象的思考、判断、指導や経験からの学習、実用的な理解などの知的機能が該当する。言語理解、作動記憶、知覚推理、定量的推理、抽象的思考、認知効率が重要な要素となる。基準Bは適応機能に関するもので、同じ年齢、および社

会文化的な背景を持つ人と比較して個人的自立、社会的責任における集団の標準をどれだけ満たしているかどうか、というものである。概念的（学問的）領域、社会的領域、実用的領域の3つの領域における論理的な思考についてである。基準Cは、発症は発達期の間ということである（日本精神神経学会監修 2023）。

知的障害のある人の全体的な状況としては、18歳未満の知的障害児数は22.5万人（在宅21.4、入所1.1）、18歳以上の知的障害者は85.1万人（同72.9、12.2）、年齢不詳を含めた総数は109.4万人（同96.2、13.2）となっている。年齢構成別では18歳から64歳が58.0万人（全体の60.3%）、18歳未満が21.4万人（22.2%）、65歳以上が14.9万人（15.5%）と64歳までが多くを占めており、65歳以上が7割以上の身体障害と異なる特徴がある。男女別では（65歳未満療育手帳所持者）、男性が49.7万人（62.5%）、女性が29.5万人（37.1%）となっている（内閣府 2023）。

総数の推移は2011年との比較で約34万人増加しており、これについては、「発達期以降に新たに知的障害が生じるものではないことから、身体障害のように人口の高齢化の影響を大きく受けることはない。以前に比べ、知的障害に対する認知度が高くなり、療育手帳取得者の増加が要因の一つと考えられる」ことが示されている（内閣府 2022）。

（2）知的障害のとらえ方

知的障害に関するアセスメントは複数ある。「知的機能」のアセスメントでは、「田中・ビネー式知能検査」、「ウェクスラー式知能検査」、「K-ABC-II」があり（丹羽 2019）、「適応機能」のアセスメントでは「日本版 Vineland-II」、「S-M 社会生活能力検査」（細川 2022）などがある。また、「日本版 Vineland-II」には、コミュニケーション、日常生活、社会性、運動スキルといった領域がある他、障害のある人の福祉サービス利用に関しては障害者総合支援法の「障害支援区分」（杉浦 2020）といったとらえ方もある。さらに、検査や指標ではないものの、運動技能の習得には、「情報処理能力」、「認知能力」が関わること（鈴木 2022）や、知的障害における心理機能と発達支援を「入力系（知覚）」、「情報処理系（問題解決、学習、言語、

記憶）」、「出力系（運動）」に分けて捉える（小池 2001）ことが心理モデルの一つとして示されている。

その上で本稿では、DSM-5-TRの「概念的領域」、「社会的領域」、「実用的領域」3つの領域を中心に、スポーツ場面を意識して知的障害の特徴を検討する。

3. DSM-5-TRの3つの領域と知的障害者スポーツの特徴

（1）概念的領域

概念的領域は、「記憶、言語、読字、書字、数学的思考、実用的な知識の習得、問題解決、および新規場面における判断においての能力についての領域（日本精神神経学会監修 2023）」とされている。スポーツにおける活動内容、競技や種目の本質に対する基本的なとらえ方、ルールや道具・用具の理解、判断力が関係する。

この概念的領域について実際の知的障害者スポーツをみてみると、次のような具体例がある。活動の本質やルール、用具の理解については、「最初はボールにさえ興味を持ってくれませんでした。ボールが転がってきても目を合わせない（太宰 2003）」、「もっともむずかしい点は用具の使用（太宰 2003）」、「陸上のリレーは、徹底したバトンタッチの練習からはじめた。運動会など、タッチせずそのまま走りつづける子もいる（沢田 1982）」、「何周だとか、あと何回だとか数字がダメ。その辺りに焦点を合わせられない。ハンディがある（日本スペシャルオリンピック委員会 1983a）」といったことがみられる。

また、競技の意味、記録や勝ち負けの理解、それを乗り越えようとすることについては、「味方のゴールに向けて蹴っていた（長井・坂口 1982）」、「味方同士でボールをとりあう（長井・坂口 1982）」、「（バスケットボールで）闘争心のようなものがない（日本スペシャルオリンピック委員会 1983b）」、「走るつらさに負け練習を休んだりする者も出てきた（武田 1983）」といったことが示されている。また一方では、「生徒の中には結構競争心を持ったものもいる。一つ遅い段階の子が、自分から『何々君と走らせてくれ』といってくる（日本スペシャルオリンピック委員会 1983b）」こ

とも報告されている。この他に、「スタートラインについても『よーい』でフライングする選手が多く、スタートがうまくできない(本田 1983)」といったこともみられ、概念の理解、および後述する実用的領域の自己の体のコントロールどちらにも関係する可能性がある。これらは基本的な概念理解が関係していると考えられる。

この領域に関係する(知的障害のない)一般的な発達については保育や幼児教育の分野で既に知見が示されている。全てが直接的に関係するわけではなく、また全てを網羅しているわけではないと認識したうえでみえる。具体的に、「順番、交代などがわかるようになる(3歳)、競争する楽しさを知る、ルールのあるあそびを楽しむ(5歳)(柳澤・柳澤 2014)」、「5歳児になるとお互い競争意識が生まれ(途中省略)4歳ではあまり見られなかった競争の意識が5歳になると目に見えるようになり、遊びの中でも競う遊びが増えてくる(森・青木 2020)」といったことが報告されている。スポーツの大きな特徴ともいえる競い合いに関係する内容である。

また、田坂(2022)は、精神年齢(MA)が2歳から5歳の知的障害児を対象に、課題解決時の発話について検討し、5歳で課題解決(目標理解)や解決方法についての発話が他のMAよりも高く、また2歳では課題解決に向けた発話はほとんど見当たらないことを報告している。ただし、MA5歳児であっても、自己の遂行を言及したり助けを求めるような発話は定型発達児と比べて弱いことが予想されるとしている。松寄(2023)では、「(5～6歳では)できないことに対して挑戦して努力する姿が見られるようになる」と述べている。

発達に応じて課題解決(目標理解)の発話が高くなることや、できないことに挑戦することが示されている。ここまでの内容を表1、2にまとめる。

(2) 社会的領域

社会的領域とは、「特に他者の思考、感情、および体験を認識すること、共感、対人的コミュニケーション技能、友情関係を築く能力、および社会的な判断についての領域」ということである(日本精神神経学会監修 2023)。スポーツ場面においては仲間や指導員・コーチ等とのコミュニケーション、他者との協働、チームワークなどが関係する。

この社会的領域について実際の知的障害者スポーツをみると、次のような具体例がある。「うまくコミュニケーションがとれない、言葉がはっきり聞きとれない(太宰 2003)」などコーチの言葉が通じない、言葉を通して考え、コーチの言葉や意図を理解することの特徴が示されている。他者の存在の理解については、「パスを出す、パスをもらうというのが一番の課題(太宰 2003)」、「自分だけのプレーだけでなく、相手すなわち、味方と敵の動きを見て考えてプレーしていかなければならない。このぐらいの練習になるとかなり難しい(福岡 1983)」などがみられる。また、「知的障害のある子どもの場合、運動技能に問題はなくとも対人関係や体を動かすことの不器用さによって運動することに困難さを示す(山田・舟橋 2012)」ことも示されており、これらも知的障害者スポーツの実践場面における特徴だといえる。さらに、「みんなと一緒にやらなかった。つねに離れていた(太宰 2003)」ということからは仲間

表1 知的障害者スポーツでみられる具体例

- ・ボールに興味を持たない
- ・用具の使用が難しい
- ・バトンタッチせずに走りつづける
- ・あと何周とかの数字がダメ
- ・闘争心のようなものがない
- ・味方のゴールに向かう
- ・味方同士でボールをとりあう

表2 一般的な発達の内容

- ・順番、交代などがわかる
- ・ルールのある遊びを楽しむ
- ・競争する楽しさを知る
- ・競争意識が生まれる
- ・課題解決(目標理解)の発話が高くなる
- ・できないことに挑戦する

との活動に参加しない（加わらない）人がいることがうかがえる。

この領域に関係する他者とのコミュニケーション、スポーツの協働については、前節と同様に（知的障害のない）一般的な発達段階が保育や幼児教育の分野でいくつかの知見が示されている。全てが直接的に関係するわけではないと認識したうえでみると、「自分でやれたことをほめられたり認められたりする経験によって満足感を味わい、自信や挑戦意欲も育ってくる（2～3歳ごろ）（横山 2019）」、「集団あそびを始める、友だちの個性に気づき始める（4歳）（柳澤・柳澤 2014）」、「集団の中での役割を考える、周りに合わせられる、達成感を感じるようになる、友だちの個性を認め始める5歳（柳澤・柳澤 2014）」、「仲間とのやり取りが活発になりはじめ、ルールを理解ができるようになるため、集団遊びが楽しめるようになる（4歳ごろ）（横山 2019）」というものがある。

言語に関しては、「身体コントロール・調整能力と言語発達との間には一定の関連がある（田辺・田村・中川 1987）」、「（5歳で）言葉でイメージを共有する」（柳澤・柳澤 2014）」ことが示されている。さらに、言語機能には「伝達機能、思考機能、行動調整機能がある（小松 2023）」とされており、自身の身体機能・コントロールの他にも、仲間や指導員・コーチ等とのコミュニケーションなどスポーツにおいて様々な場面で関係する部分だと考える。もう少し専門的なものでは、「課題遂行中の発話内容をみると、MA3歳は、①目標に関する発話があったものの、②方略や③修正に関する発話の方が多く、同時に（発話はなく）他者への注視のみを示した者も、他のMAよりも

多くなった。MA4歳では、MA3歳に比べて目標や方略に関する発話者数が若干であるが少なくなり、MA5歳になると、目標、方略、修正についての言及がMA4歳と比べて再び多くなる結果となった（田坂 2022）」といった知見もみられる。

また、小松（2023）は「1人遊び⁶⁾は発達的に未熟な形態と見なされてしまうが、実際には仲間遊びが十分にできる年長児でもブロックなど1人で集中して遊ぶ姿が見られることから、1人遊びは仲間との遊びへの単なる前段階ではなく、子ども自身が選んでいるともいえる」と述べている。仲間に入らず一人で活動するという点については、知的障害者スポーツにおいても今後詳細な研究が求められる部分である。この領域の概要を表3、4にまとめる。

（3）実用的領域

実用的領域とは、「特に自己管理、仕事の責任、金銭管理、娯楽、行動の自己管理、および学校と仕事の課題の調整といった実生活での学習および自己管理についての領域（日本精神神経学会監修 2023）」ということである。スポーツ場面においては、自分の体の動き、コントロールなどが関係する。

この内容について知的障害者スポーツにおける具体例をみると、「他者の動作の一つ一つは『捉え』ていても、自己の身体のどの部分を、どのように動かせばよいのかわからないようにみえる（田辺・田村・桑田 1986）」、「（ボウリングで）腕を振り上げてボールを投げることでできる選手はいない。床にボールをおき、両手どころがしてゲームが進められる（石田 1982）」といった

表3 知的障害者スポーツでみられる具体例

- ・うまくコミュニケーションがとれない
- ・言葉がはっきり聞きとれない
- ・パスを出す、もらうのが一番の課題
- ・味方と敵の動きを見て考えるのはかなり難しい
- ・対人関係や体を動かすことの不器用さ
- ・みんなと一緒にやらない、離れている

表4 一般的な発達の内容

- ・経験によって満足感を味わう
- ・集団あそびを始める
- ・友達の個性に気づき始める
- ・集団の中で役割を考える
- ・周りに合わせられる
- ・仲間とのやり取りが活発になる
- ・言葉でイメージを共有する

ことがみられる。

また、「指導者が実際に走って見せて、それから一緒に行くが、なかなか動きがわからない者がいる(福岡 1983)」、「『模倣』しようとしなく、その子どもなりに模倣しようと努力しているのではあるが、うまく表現できない、一つの運動動作にまとめあげることができないという場合も多い(田辺・田村・桑田 1986)」、「単純な反復動作は巧妙に遂行することができるが、姿勢模倣の協応課題や動作模倣課題のようなやや複雑な動作ではほとんど動けない(田辺・田村 1988)」などがみられる。これについては、「自閉症児は他の障害児と比べて模倣能力が低い(長曾我部 2004)」という研究結果も報告されている。

動きのコントロールについても特徴が示されている。藤原・石川(2006)は中度精神遅滞児の運動技能について、「丁寧に教え、繰り返し練習すると一応できるようにはなるが、全力を出してやることができるようにはならず、巧緻性のある動きにもならない。『一応できる』の先は大変難しいらしく、一般的にこの壁を越えることなく停滞してしまう」と述べている。また、自身の体のコントロールや巧緻性、および複数の運動要素の組み合わせは容易ではないようで、「25m完泳する生徒によりきれいに泳ぐ(それはスピードをあげる、楽に泳ぐ技術である)を教えるのは難しさを感じる(高橋 1983)」、「生徒の泳ぎはムチャクチャな泳法である(高橋 1983)」、「走幅跳びなどでも、筋力的にはすぐれているのだが、それを助走、踏み切り、着地といった一連の動作にうまくむすびつけられないものが多い(武田 1983)」、「ドリブルをしながらジャンプしてシュート、この一連の動作のタイミングがなかなかとれない(福岡 1983)」といったことが報告されている。

タイミングを取ったり、先を読んだりすることについても、「ターゲットをめがけうまく手をはなすタイミングがつかめない、投げるタイミングも教えるがうまくいかない(沢田 1982)」、「特に共通して言えることは、空中にあるボールの処理が非常にまずいこと(久保田 1983)」、「(サッカーで)走りながらパスするときに相手の移動先を予測してパスを出すことも難しい課題(松坂 2017)」などがみられる。

この他、「発作をもっている為、抗てんかん剤の服用によって動作もかんまん(松井 1983)」といったことも報告されている。知的障害者スポーツにおける当事者の身体的な特徴の一つであり、指導員・コーチ等が留意すべき点だといえる。

本節でみた特徴はスポーツにおける自分の身体状況の理解やコントロールといったことであり、前々節、前節と同様にこの領域でも(知的障害のない)一般的な発達段階については、保育や幼児教育の分野で既にいくつかの知見が示されている。全てが直接的に関係するわけではなく、また全てを網羅しているわけではないと認識したうえでみえる。

体の動きについては、「歩く、走る、跳ぶが安定する」、「AしながらBする協応動作ができ始める」、「動作がダイナミックになる(3歳)」、「走る動作が安定する」、「全身のバランス力が整い始める(4歳)」、「運動能力の基礎が完成する」、「手指を器用に動かす」、「多様な動きを組み合わせるあそび」、「持続力が身につく(5歳)(柳澤・柳澤 2014)」といったことが示されている。森・青木(2020)ではもう少し具体的に、「2歳から7歳の段階で<たつ、ねる、まわる、ころがる、のる、ぶらさがる、体をふる、バランスをとる>といった姿勢制御運動、<あるく、はしる、とぶ、はう、すべる、のぼる、はいる、スキップする>などの移動運動、<うつ、ける、なげる、うける、まわす、ふる、ひく、おす>といった操作運動のパターンが習得される(森・青木 2020)」ことが示されている。さらに7歳を過ぎる時期は、「基礎的な運動の段階」から、いろいろなスポーツに必要な専門的スキルを習得し、向上させていく「専門的な運動の段階」へと移行していく時期(森・青木 2020)」とされている。

また、概念学習や推論能力の発達に加え自身の認知活動を監視・コントロールするメタ認知について、「幼児期後半になるとメタ認知の萌芽がみられるようになり、とくに5歳半になるとメタ認知の発達が加速し始める(長田 2019)」とされている。自身の身体の認知についても、「5歳児の方が4歳児よりも身体部位の認知が有意に高く、ボディ・イメージの形成が加齢とともに増加していく傾向と発達差が明らか(田中 2006)」、「運動

能力の高い幼児ほどボディ・イメージ得点が高く、身体部位の認知が高いとともに、自己のボディ・イメージをしっかりと確立していることが明らか(田中 2006)」などの研究結果がある。さらに、「児童期では得意・不得意を自覚するようになる(長田 2019)」ことが示されている。

運動の予測については、「自分の行動を予測、比較し始める(4歳)(柳澤・柳澤 2014)」、「5歳から6歳になると(途中略)コースを予測(早回り)して捕まえることができるようになっていく。運動をフィードフォワードコントロール(=運動を予測して運動を開始)している(森・青木 2020)」、「幼児期は、フィードバックコントロールからフィードフォワードコントロールへと移行していく時期であるとともに、この経験の積み重ねによって動きが目的的に変化していく時期でもある(森・青木 2020)」、「タイミングコントロール能力とは、外的事象に対して自己の動作を時間的、空間的に一致させるものである。動いているものをインターセプトしたり、反応を選択したりするタイミングコントロール能力は幼児期から発達し、児童期に入ってほとんど大人と同じレベルになる(森・青木 2020)」などの知見がみられる。この領域の概要を表5、6にまとめる。

(4) 特徴の一つとしてのDCD

ここまでみてきた概念的領域、社会的領域、実用的領域の3つの領域ではないものの、DSM-5-TR(日本精神神経学会監修 2023)では発達性協調運動障害(DCD: Developmental Coordination

Disorder、以下DCDと表す)という考え方も紹介されている。知的障害者スポーツに少なからず関係するものであるためごく簡単に概観する。

DCDは身体各部の協調運動の制約、不器用さなどのことで、スポーツの様々で求められる正確さ、俊敏さ、バランス、身体の協調した動作に関係する。次の4つの診断基準(特徴)があり、順番に診断基準Aは、その人の生活年齢や学習および使用の機会に応じて期待されるものよりも明らかに劣り、不器用でスポーツに参加するなどの運動技能における遅さと不正確さによって明らかになる。基準Bでは生活年齢にふさわしい日常生活活動を著明に、持続的に妨げ、学業や就労、余暇、遊びに影響を与える、基準Cはこの症状が発達段階早期に始まり、基準Dでは運動技能の困難さが知的能力障害や視覚障害によってうまく説明されず、運動に影響を与える神経疾患によるものではない、とされている。

動作の緩慢さや不器用さがみられる知的障害のある人については、「知的発達の遅れおよび運動経験の少なさによる基礎的運動スキルの未習得が大きく関係しているものと思われるが、(途中略)DCDの影響も関与していることも考えられる(松原 2012)」という考え方もされている。ただし、「知的障害児にDCDが高い割合で合併しているとは断言できない(平田 2018)」という考え方も示されている。以前は、その診断において知的障害のある人は除外されている部分もあったが、現在では知的障害とDCDを併存する人がいると捉えられるようになってきている(宮原 2019)。この

表5 知的障害者スポーツでみられる具体例

- ・腕を振り上げてボールを投げられない
- ・指導者が実際に動きを見せても動きがわからない
- ・身体のどの部分を、どのように動かせばよいのかわからない
- ・模倣しようとしているがうまく表現できない、運動動作にまとめられない
- ・一連の動作のタイミングがとれない

表6 一般的な発達の内容

- ・歩く、走る、跳ぶが安定する
- ・協応動作ができる
- ・手指を器用に動かす
- ・自分の行動を予測、比較する
- ・自己のボディ・イメージの確立
- ・コースを予測してとらえられる
- ・動いているものに反応する
- ・タイミングコントロールが発達する
- ・得意・不得意を自覚する

DCDと運動については、過程指向型アプローチ、課題指向型アプローチという介入方法（増田 2019）や、運動アセスメントの視点（平田 2019）、従来からの実践をふまえた上でのダイナミック・システムズ・アプローチの活用（村上 2019）などの対応とともに今後の研究の蓄積への期待が示されている。

4. 考察

本稿では、米国精神医学会の精神疾患の診断統計マニュアル第5版（DSM-5-TR）の「概念的領域」、「社会的領域」、「実用的領域」の3領域を意識して、スポーツ場面の具体的な事象を中心に「知的障害とはどのようなものか」をみてきた。加えて、全てではないものの一般的な発達の内容について確認した。これらをふまえ、以下、知的障害者スポーツにおける障害理解について考察する。

（1）知的障害者スポーツ指導員・コーチ等の専門性

知的障害者スポーツにおける具体例を3領域で確認したが、実態を表すもののうち発達段階などを意識した内容はほとんどみられなかった。知的障害者スポーツにおける実態、言わば「あるある」は共有できるけど、個々の当事者のスポーツ場面における制約や苦手部分が全体のどこに位置しているのか、それがどういうことなのか、今回確認した中では十分には示されていなかった。指導員・コーチ等にとってはどこに着目し、どのように支援、指導すればいいのか分かりにくいということであり、結果的に、「ゆっくり」「ていねいに」といった抽象的な表現になってしまう。多くの知的障害者スポーツの実践現場や研修会などで同じような状況になっていると推察する。知的障害のある人の特徴と、一般的な発達論をそのまま結び付けられるということにはならないだろうが、本稿でみてきたような保育や幼児教育の発達段階の知見は参考になる部分も多く、研修会やミーティング、資料などでもう少し取り入れてもいいと考える。初めて関わる人にとっても分かりやすく、支援者のすそ野を広げることにもつながると期待する。

また、知的障害者スポーツでは一人ひとりがス

ポーツに求めているものも異なる上に、それを自覚し表出することに制約がともなう（田引 2022）。さらに、本稿で着目した概念的、社会的、実用的という3つの領域においても見える部分と、見えにくい部分が存在することになる。可能な範囲で指導員・コーチ等はスポーツそのものへの要求に加え3つの領域の制約・苦手部分も適切にとらえ、応えていくことが求められ、個別性を重視しスポーツ場面に則したアセスメントを行うなどの対応が期待される。

ただし、領域・分野ごとの発達、課題を把握し、その部分を単に改善する、できるようにするというようなことを目指すならばそれはスポーツではなく機能訓練やリハビリテーションとなってしまう可能性がある。本稿で検討していることは知的機能の改善や発達促進、または勝ち負けや記録の向上を主たる目的にしたものではない。そうではなく、知的障害者スポーツの指導・コーチングにおける一つの見方、とらえ方であり、一人ひとりがその要求に基づきスポーツに参加するために、楽しめるようにするために、スポーツ場面における知的障害の特徴をあらためて確認したものである。スポーツに求めているものに加え、概念的、社会的、実用的の各領域の特徴を意識した上での対応や支援が必要ということである。このことは知的障害者スポーツ指導員・コーチ等の専門性の一部と成りうる。

（2）環境の影響と二重の個人差

ここまでみてきたとおり、知的障害のある人は身体機能にもそれぞれ特徴があり、身体面は「障害のない人と変わらない」ということにはならない。奥住（2012）は知的障害者の身体運動について、複数の研究（Bruininks 1974；奥住ほか 2009；奥住ほか 2000）に触れつつ、「同一年齢の健常者より運動機能の低い者が多い。知能指数（IQ）や精神年齢（MA）の高い者ほど運動機能が高い、知的障害者の運動機能は個人差が大きい」と、全般的に運動機能が低いということを示している。さらに、「知的障害児の運動機能についての研究は、現在に至るまで決して多いものではなく、その特性が十分に解明されているとはいえない」（平田 2018）」と、その検討が十分でないことも

報告されている。

加えて、「獲得した能力を土台としてその上に新たな能力を積み上げていく（後藤 2001）」ということや、「運動発達は機能的、環境的、課題的な制約との相互関係の中で進むとして、個人の身体成長・成熟のみで進んでいくものではない（鈴木 2022）」という見方もある。知的機能や精神年齢の検査・測定の結果が同じようなものであったとしても、生活環境や日々の身体機能の活用による影響も少なくないといえる。スポーツ場面に至るまでの「土台・基礎」の部分が異なるということであり、結果的に個人差が大きいということになる。さらに、本稿でみた「概念的領域」、「社会的領域」、「実用的領域」の各領域の発達、成長段階は一人の中でも異なり、領域ごとに差が生じている可能性がある。二重の意味で個人差が大きいことになる。

前節でも述べたが、知的障害のある人は自身の身体状況を自覚し、表出することに制約がともなう。指導員・コーチ等周りの理解が不可欠で、逆を言えば、環境やまわりの意識、対応が十分でない中では、知的障害者スポーツそのものの効果が得られない、あるいは当事者が持っている本来の力が発揮できなくなってしまう。実践においては「個人差が大きい」ということを前提とし、その上での具体的な活動内容やかかわり方の工夫だと考える。

（3）今後に向けて

今回、DSM-5-TRの「概念的領域」、「社会的領域」、「実用的領域」という3つの領域に着目してみたが、知的障害者スポーツにおける実態や特徴をまとめたまでで具体的にどうすればいいのかまでは示していない。各領域の詳細な検討は次回の課題とする。また、冒頭（1－3節）で述べたように本稿は主に「参加型」の知的障害者スポーツを意識して展開したが、他方では競技性やスポーツらしさを考えることが提起されている（矢吹 2003；田引 2020）。これも今後の課題の一つであり、ここまでの検討内容をふまえ最後に簡単に触れておく。

知的障害者スポーツにおいては個人差も大きく、一人ひとりのとらえ方、求めているものも異なる。

制約がある部分への何らかの支援やサポートも必要となる。そのような中においては「その人にとって最大限にパフォーマンスを発揮する」ことも知的障害者スポーツの競技性、スポーツらしさの一つのあり方だと考えたい。一般的なスポーツから見ると十分ではないかもしれないが、指導員・コーチ等には一人ひとりが持っている能力や可能性を最大限に引き出そうと支援（保障）することが求められる。また、知的障害のある人にとっては「重要な他者からの賞賛や叱責は、本人の努力や能力が直接的に影響する学業や運動といった領域において影響を及ぼす（小島 2010）」ことが報告されている。様々な制約があり個人差も大きい。だからこそその障害理解であり、知的障害者スポーツの指導員・コーチ等の役割、存在意義だと考える。

なお、本稿はすでにある知的障害者スポーツの指導員・コーチ等の養成や教材・資料などを否定するものではない。それらの意義は大きく、また一般スポーツや先行する身体障害者スポーツから導き出された知見なども同じように意味があると考え。その上で、自身の身体状況などを自覚し、表出することに制約がある人たちのスポーツ場面における特徴を検討したものであり、併せてそれをも含めた一人ひとり異なるスポーツに対する願いや想いをとらえ、応えることの大切さを再考するものである。前述（4－2節）のとおりこの分野ではまだ研究は多いものではない。今後、研究方法のさらなる確立、蓄積のもと、知的障害者スポーツのすそ野が広がることを期待する。

〈注〉

- 1) 1992年から「全国精神薄弱者スポーツ大会（ゆうあいびっく）」が実施されている。その後、3障害（身体、知的、精神）が統合された「全国障害者スポーツ大会（2001年から名称変更）」へと続くことになる（日本障がい者スポーツ協会 2021）。
- 2) 具体的には、スペシャルオリンピックス日本（1994年）、日本知的障害者水泳連盟（1999年）、日本知的障害者卓球連盟（1999年）、FIDバスケットボール連盟（1999年）、日本知的障害者スポーツ連盟（2000年）などがある（日本障がい者スポーツ協会 2021；田引 2020）。

- 3) 例えば、民間の知的障害者スポーツ組織「スペシャルオリンピック日本」では、全国でスポーツ場面でコーチや、運営等に携わるボランティアが年間1万5千人以上参加している（スペシャルオリンピック日本 2020）。
- 4) 小松（2023）は、遊びの発達と仲間関係についてM. パーテンの知見として「①遊ばずにぼんやりしている、②1人遊び、③他児を見ているが遊びには入らない「傍観」、④他児と同じ場所で自分だけで遊んでいるが同じようなことをしている「平行遊び」、⑤他児と一緒に遊び、活動について会話ややりとりがある「連合遊び」、⑥一定の目的のために一緒に遊ぶ「協同遊び」の6つの型」を紹介している。「そして2～5歳までは平行遊びが出現する割合が最も高いこと、1人遊び、平行遊びは2～4歳と加齢とともに減少しているが、連合遊び、協同遊びは増加していることを見出した」ことに触れている。

〈文献〉

- American Psychiatric Association (2021) Diagnostic and statistical manual of mental disorders, fifth edition (=2023, 日本精神神経学会監修, 高橋三郎・大野裕監訳, 染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村 将・村井俊哉・中尾智博訳『DSM-5-TR™ 精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院, 37-44.)
- 長曾我部 博 (2004)「自閉症とアダプテッド・スポーツ」矢部京之助・草野勝彦・中田英雄編著『アダプテッド・スポーツの科学』175-179.
- 中央法規出版編 (2010)『五訂社会福祉用語辞典』中央法規出版, 400.
- 太宰由紀子 (2003)『ゆっくりゆっくり笑顔になりたい』スキージャーナル, 114, 116, 122, 169, 229.
- 藤原由希子・石川尚子 (2006)「中度精神遅滞児の運動技能の向上における全力発揮の難しさとその乗り越えの可能性について: 走運動のトレーニングを通して」日本女子体育大学紀要, 36, 69-78.
- 福岡 昭 (1983)「一つの目標に向かって全員で努力して… - 神奈川県立藤沢養護学校のバスケットボールの2年間の指導記録 -」『スペシャルオリンピック6』ベースボールマガジン社.
- 後藤邦夫 (2001)「知的障害のある人の教育の実際」糸野豊・花村春樹監修, 中川一彦・藤原進一郎・小玉一彦・高橋まゆみ編『障害者教育の人間学』中央法規, 115-138.
- 平田正吾 (2018)「知的障害児と自閉スペクトラム症児における運動機能についての研究動向 - 発達性協調運動障害との関連とMABC-2による評価 -」特殊教育学研究, 56(4), 241-249.
- 平田正吾 (2019)「DCDを伴う知的障害児の特性と支援」辻井正次・宮原資英監修, 澤江幸則・増田貴人・七木田敦編『発達性協調運動障害 DCD』金子書房, 160-173.
- 本田正明 (1983)「スペシャルオリンピックその輝かしき未来」『スペシャルオリンピック5』ベースボールマガジン社.
- 細川美由紀 (2022)「知的障害を理解するための心理学的基礎」勝二博亮編『知的障害児の心理・生理・病理』北大路書房, 7-20.
- 石田富男 (1982)「彼らがあんなに晴れ晴れとした表情をしていた!」『スペシャルオリンピック3』ベースボールマガジン社.
- 小池敏英 (2001)「知的障害における心理機能と発達支援」小池敏英・北島善夫『知的障害の心理学』北大路書房, 23-164.
- 小島道生 (2010)「知的障害児の自己概念とその影響要因に関する研究 - 自己叙述と選択式測定法による検討 -」特殊教育学研究, 48(1), 1-11.
- 小松 歩 (2023)「幼児期」無藤 隆編著『発達の理解と保育の課題 第三版』同文書院.
- 厚生労働省「知的障害児(者)基礎調査: 調査の結果」用語の解説、<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/101-1c.html>, 2023. 1. 5 参照.
- 久保田太朗 (1983)「厳しい練習に耐え彼らの目は輝いていた 大阪市立生野養護学校サッカー部の指導記録」『スペシャルオリンピック6』ベースボールマガジン社.
- 増田貴人 (2019)「DCDに対する介入の方法論」辻井正次・宮原資英監修, 澤江幸則・増田貴人・七木田敦編『発達性協調運動障害 DCD』金子書房, 71-85.
- 松原豊 (2012)「知的障害児における発達性協調運動障害の研究 - 運動発達チェックリストを用いたアセスメント -」こども教育宝仙大学紀要, 3, 45-54.
- 松井タツ子 (1983)「第2回スペシャルオリンピック全国大会に参加して」『スペシャルオリンピック6』ベースボールマガジン社, 49.
- 松坂晃 (2017)「知的障害児の運動技能習得に関する研

- 究－特別支援学校中学部におけるサッカー授業実践から－」茨城大学教育実践研究, 36, 323-329.
- 松寄洋子 (2023)「保育と発達過程と段階」無藤 隆 編著『発達の理解と保育の課題 第三版』同文書院, 70.
- 宮原資英 (2019)「DCDにまつわる歴史」辻井正次・宮原資英監修、澤江幸則・増田貴人・七木田敦編『発達性協調運動障害 DCD』金子書房, 14-44.
- 森 司朗・青木久子 (2020)「運動コントロール能力は幼児期から児童期にかけて急激に発達する」『領域研究の現在〈健康〉』萌文書林, 166.
- 村上祐介 (2017)「知的障害」藤田紀昭・齊藤まゆみ『これからのインクルーシブ体育・スポーツ』ぎょうせい.
- 村上祐介 (2019)「DCDを伴うASD児への特性と支援」辻井正次・宮原資英監修、澤江幸則・増田貴人・七木田敦編『発達性協調運動障害 DCD』金子書房, 174-195.
- 長井勘治・坂口和弘 (1982)「スペシャルオリンピックが与えたもの」『スペシャルオリンピック2』ベースボールマガジン社.
- 長田瑞恵 (2019)「身体的機能・運動機能の発達と心理面の発達に関連」無藤 隆・掘越紀香・丹羽さかの・古賀松香編著『保育の心理学－子どもの育ち・学びを知る－』光生館.
- 内閣府 (2022)「障害者白書 令和4年版」213-219.
- 内閣府 (2023)「障害者白書 令和5年版」218-229.
- 日本パラスポーツ協会編 (2023)『障がいのある人のスポーツ指導教本 (初級・中級)』ぎょうせい, 2-40, 118-123.
- 日本障がい者スポーツ協会編 (2020)『障がいのある人のスポーツ指導教本 (初級・中級)』ぎょうせい, 2-40, 120-123.
- 日本障がい者スポーツ協会 (2021)「障がい者スポーツの歴史と現状」https://www.jsad.or.jp/about/pdf/jsad_ss_2021_web.pdf 2021. 9 参照.
- 日本スペシャルオリンピック委員会 (1983a)「スペシャルオリンピックの今後目ざすべきもの」『スペシャルオリンピック7』ベースボールマガジン社, 62.
- 日本スペシャルオリンピック委員会 (1983b)「スペシャルオリンピック この感動を日常指導の中へ」『スペシャルオリンピック6』ベースボールマガジン社, 21, 24.
- 丹羽さかの (2019)「子ども理解における発達の把握」無藤 隆・掘越紀香・丹羽さかの・古賀松香編著『子どもの理解と援助 育ち学びをとらえて支える』光生館.
- 奥住秀之・牛山道雄・葉石光一・田中敦士 (2000)「7つの課題からみた知的障害者の身体運動能力」*Anthropological Science (Japanese Series)* 108 (2), 91-99.
- 奥住秀之・國分 充・平田正吾・葉石光一・田中敦士・北島善夫 (2009)「知的障害者の運動能力モデルとそれに関連する属性変数」*障害者スポーツ科学*, 7 (1), 47-53.
- 奥住秀之 (2012)「知的障害者の運動機能の制約とその支援」*障害者問題研究*, 40(1), 10-17.
- 大久保春美 (2012)「障害者スポーツの意義と理念」日本障害者スポーツ協会編『改訂版 障害者スポーツ指導教本 初級・中級』ぎょうせい, 23-26.
- Robert H. Bruininks (1974) *Physical and Motor Development of Retarded Persons, International Review of Research in Mental Retardation, Volume 7*, 209-261.
- 沢田正雄 (1982)「やればできるの自信が…－子どもたちとともに苦勞して－」『スペシャルオリンピック1』ベースボールマガジン社.
- 曾根裕二 (2017)「知的障がい者とアダプテッド・スポーツ」植木章三・曾根裕二・高戸仁郎・伊藤秀一・梅崎多美・金子勝司・佐藤敬広・高橋春一・竹内 亮・秦希久子・古林俊晃・安田友紀『アダプテッド・スポーツ概論』東京教学社.
- 杉浦 誠 (2020)「障害者の福祉」岩松珠美・三谷嘉明編『六訂 栄養士・管理栄養士をめざす人の社会福祉』みらい.
- スポーツ庁 (2021)「障害者スポーツ推進プロジェクト (障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究) 報告書」.https://www.mext.go.jp/sports/content/20210430-spt_kensport01-000014680_20_2.pdf, 2022. 3. 19参照.
- スポーツ庁「第3期スポーツ基本計画」.https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm, 2023. 11. 14参照.
- スペシャルオリンピックス日本 (2021)「アスリート理解 ～アスリートとともに～」.
- スペシャルオリンピックス日本編 (2020)『スペシャルオリンピックス日本25周年記念誌』.
- 鈴木浩太 (2022)「第7章知的障害児の運動機能」勝二博亮編『知的障害児の心理・生理・病理』北大路書房, 115-130.

- 田引俊和 (2020)『日本の知的障害者スポーツとスペシャルオリンピックス』かもがわ出版.
- 田引俊和 (2022)「知的障害のある人がスポーツに求めるものとのとらえ方」北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 15, 81-91.
- 高橋義雄 (1983)「初めての公式水泳競技 泳げた！自己記録だ！」『スペシャルオリンピックス5』ベースボールマガジン社.
- 武田千秋 (1983)「陸上競技部を指導して」『スペシャルオリンピックス5』ベースボールマガジン社.
- 田辺正友・田村浩子・桑田真 (1986)「発達における機能連関に関する研究(4)－精神遅滞児の運動機能と身体模倣能力－」奈良教育大学紀要, 人文・社会科学, 35(1), 201-211.
- 田辺正友・田村浩子・中川貴明 (1987)「精神遅滞児の運動発達－身体コントロール・調整課題による分析－」奈良教育大学紀要, 人文・社会科学, 36(1), 95-105.
- 田辺正友・田村浩子 (1988)「精神遅滞児の身体運動模倣の発達－身体像との関連－」奈良教育大学教育研究所紀要, 24, 11-17.
- 田中千恵 (2006)『幼児期のボディ・イメージと運動能力』ミネルヴァ書房.
- 田坂裕子 (2022)「知的障害児のプランニング－課題解決時の発話の検討－」神奈川大学心理・教育研究論集, 52, 63-74.
- 時本英知・増田貴人 (2021)「障害者スポーツ指導者養成における知的障害に関する教育内容」弘前大学大学院地域社会研究科年報, 17, 17-32.
- 時本英知・葛西崇文・増田貴人 (2022)「スペシャルオリンピックス日本のコーチ研修プログラムで示されている知的障害者支援の専門性についての検討」弘前大学教育学部紀要, 128, 83-94.
- 東京都 (2016)「障害者のスポーツ施設利用促進マニュアル」https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/pdf/shospo_manual.pdf, 12-13, 2023. 1. 5 参照.
- 矢吹知之 (2003)「障害者スポーツの統合化をめぐる基礎的考察：第1回全国障害者スポーツ大会調査からの検討」障害者スポーツ科学, 1(1): 73-81.
- 山田和広・舟橋篤彦 (2012)「サーキットトレーニングにおける知的障害児の運動指導－身体を動かすことの楽しさを育てる支援の検討－」障害者教育・福祉学研究, 8, 25-34.
- 柳澤秋孝・柳澤友希 (2014)『0～5歳児の発達に合った楽しい！運動あそび』ナツメ社.
- 横山真貴子 (2019)「身体的機能・運動機能の発達と心理面の発達の関連」無藤 隆・掘越紀香・丹羽さかの・古賀松香編著『保育の心理学－子どもの育ち・学びを知る－』光生館.